

後胃動脈の解剖学的特徴と臨床的重要性についての検討

岡林雄大 杉本健樹 小林道也 岡本 健

松浦喜美夫 荒木京二郎 小原秀一*

高知医科大学外科 *高知医科大学放射線科

目 的：後胃動脈の存在頻度や臨床的重要性は未だ明らかにされていない。本邦においても近年胃上部の癌の発生頻度が増加傾向にあり、後胃動脈の認識は胃癌手術を根治的に施行するためにも必要であると考えられる。本研究では血管造影検査所見を遡及的に見直し、後胃動脈の存在頻度、場所および大きさを同定することにより臨床に応用させる目的で検討した。

対象と方法：1991年から2001年までに当院で施行された腹腔動脈造影検査の314例を対象とした。後胃動脈陽性例ではその脾動脈からの距離および血管内腔の大きさを測定し、さらに肥満指数と後胃動脈の特徴との関連性についても検討した。

結 果：腹腔動脈造影検査において後胃動脈の陽性例は175例（55.7%）であった。脾動脈からの距離は3.2～7.4

cm（平均5.4 cm）で血管内腔の大きさは0.7～2.1 mm（平均1.4 mm）であった。肝硬変の有無別で後胃動脈の描出率を検討してみると、肝硬変例では73.2%の描出率、非肝硬変例では30.5%の描出率であった。今回の研究結果において性別、年齢別、肝硬変の有無によって後胃動脈の脾動脈からの距離および血管内腔の大きさに有意差は認められなかった。また後胃動脈の特徴と肥満指数との間に関連性は認められなかった。

総 括：肝硬変の有無によって描出率が変わってくることを考慮すれば、血管造影検査での血管内腔の描出率自体にも限界があり、上記の結果以上に後胃動脈は存在することとも考えられる。胃上部の癌に対しての外科的治療の際に、後胃動脈の臨床解剖学的特徴を確実に認識することが必要であると考えられた。

右下肢形成不全を伴った膀胱腸裂の1例

円谷美也子 藤原利男 吉田竜二 土岡 丘 田澤英幸 砂川正勝

獨協医科大学第一外科

はじめに：膀胱腸裂の発生頻度は20万～40万例の出生に1例と非常に珍しく、特に本症例のように下肢欠損を伴う場合は極めて稀である。本症例の発生学的な要因について報告する。

症 例：男児、0日齢。妊娠歴は切迫早産、妊娠2回経産1回。分娩歴は骨盤位、自然分娩、在胎34週2日、出生体重1960 g、身長41 cm、Apgar score 6/8であった。

出生直後より臍下部形成不全、鎖肛、殿部突出、右下肢形成不全を認め、当院NICUへ出生後約1時間で搬送、

入院となった。入院後の精査で、臍下部型臍帯ヘルニア、膀胱腸裂に潜在性二分脊椎、髄膜瘤、右下肢形成不全合併と診断した。同日、人工肛門造設術及び膀胱形成術を施行した。

考 察：膀胱腸裂は胎生4～8週の前腹壁の発生異常により生じるものと考えられている。下肢形成不全についても、同時期の異常によって起こったものと考えられる。これらの発生学的な経過について検討し、報告する。